2020.10.28

チンパンジーの実験のこぼれ話

小嶋祥三

実験をやっていると、論文にはならないが、これはおもしろいと思うチンパンジー幼児の行動を観察することがあった。それを書いてみる。

わたしはパンというチンパンジーを育てていた。母親はプチで、育児をしなかったので、代わりに育てた。獣医師で、現在は目白大学で言語聴覚関係の教授をしている、春原則子さんが手伝ってくれた。パンが生まれる前から、プチのお腹に超音波のプローブを当てて、胎児の観察をしていた。そのとき、プチのザッ、ザッという血流音が同時に記録された。パンが生まれて間もない頃だったと思うが、ギャーギャーともがき、泣き叫んでいるパンに、母親の胎内で聴いたであろう、ポポの血流音を聴かせてみた。すると、パンは急に静かになり、動きも治まり、眠ったようだった。類似した現象がヒトの乳児にもあると記憶している。

わたしはパンの音声発達を調べていた。そして、できるだけ声を出すように訓練していた。訓練の効果は、半ば成功、半ば失敗だったと言えるかもしれない。失敗は、チンパンジーの音声生成の自発性を十分に高めることができなかったことだ。成功は、他のチンパンジー親子にはみられず、また、ボノボの親子にもみられなかった（Oller らの研究)、母子間の音声交換が行われたことだ。しかし、論文にならなかったのは、これらの点ではない。ある時、パンがピーッと口笛を吹いたのだ。幸い録音中だったので音響分析すると、純音のように一つの周波数のみにピークがあった。無論、意図的に口笛を吹いたのではない。たまたま口唇や舌が口笛の音を出す形状だったのだろう。しかし、その時は驚いた。

パンが大きくなり、実験のため移動用のケージに入れて実験室に運んでいる時のことだった。移動用のケージは、前後左右と天井が鉄の柵のようになっており、中から外、外から中が見えるようになっていた。わたしは実験の報酬に使う果物をケージの天井に乗せていた。パンはわたしの顔を見つめ、そして視線を果物に移し、再び私の顔を見て、そしてまた果物を見た。このような行動を繰り返したのだが、これはヒトの幼児の前言語的な行動の一つ referential looking だろう。チンパンジーは pointing を理解し、ケージの中に落としてしまったものを指させば、拾ってくれる。そのような行動を見ると、ヒトとチンパンジーの近さを実感する。

これはオマケで、別のチンパンジーの話だ。ある時、クロエとアイというチンパンジーが並んで座っていた。わたしはクロエの唇を人差し指で上下させて、遊んでいた。クロエはわたしの指を咬もうとしたが、用心していたわたしは素早く指を引っ込めた。クロエの上下の歯が空振りして、カツッと音をたてた。その時、横にいたアイがクロエをド突いた。まるで、

2020.10.28

「そんなことしたらアカン！」と注意しているようだった。アイは自分たちチンパンジーとヒトの関係を理解しているように思えた。イヌでもこれくらいのことはするか？